

第2章 遺跡の概要

第1節 遺跡の立地

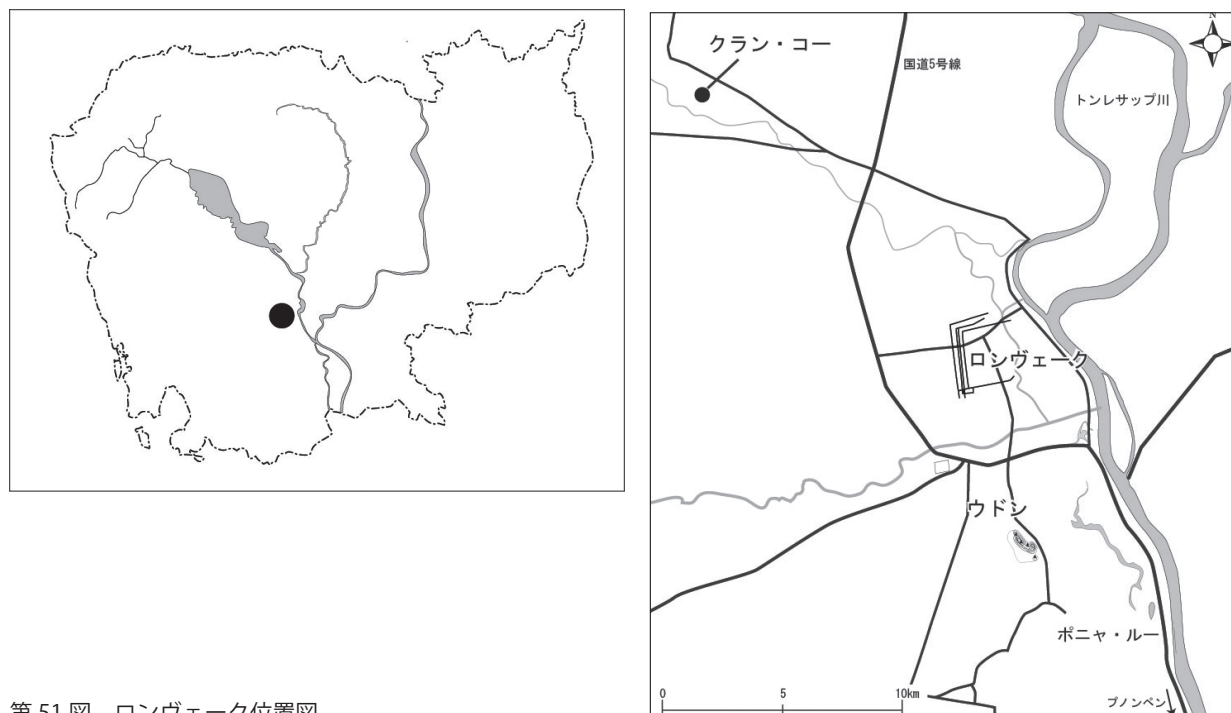
ロンヴェークはポスト・アンコール期の王都である。現在の首都プノンペンから国道5号線沿いに約35kmほど北上した地域、カンボジア東部コンボン・チュナン州コンボン・トロラッ郡に位置する。ロンヴェークの南約7kmの地域にはのちの17世紀から19世紀の王都ウドン、聖山プノム・プレア・リアチ・トロアプがそびえる。ロンヴェークはトンレサップ湖からメコン川に合流するトンレサップ川西岸の微高地上に立地している。東西約2km、南北約2.5kmの三重の土塁と堀に囲まれているが、東側には土塁は存在せず、トンレサップ川の氾濫原に向かって開口した構造をもつ。河川・陸路双方の利便性を兼ね備えた立地であるといえる。

第2節 ロンヴェークの歴史的背景

ポスト・アンコール期に関するほぼ唯一の国内文献史料である『王朝年代記』など文献史料による先行研究は、北川香子によるものが詳しい（北川1998）。北川によると、アンコール王朝は隣国アユタヤからの侵略に遭い、1431年ポニェ・ヤート王はアンコールを放棄し、スレイ・サントーのバサンに遷ったとされる。中国の『大明実録』には1372年と73年に真臘国の「巴山王」の中国への遣使記録が残されており、もともとバサンにはアンコール王朝末期ごろから何らかの勢力が存在していたと考えられる。その後ポニェ・ヤート王は王都をプノンペンへ遷都する。この頃バサン勢力と正統王勢力との争いが激化し、バサン勢力のスダチ・コーンと、正統王の弟チャン・リエチエが戦い、1525年にチャン・リエチエが勝利、即位し、1529年にロンヴェークを建都した。しかし、1594年アユタヤによりロンヴェークは陥落したとされている。その後、一時スレイ・サントーに王都が遷るが、チェイ・チェッタ王により1620年にカンボジアは統一、ウドンに王都が遷都される。1855年のプノンペン遷都までウドンは王都として存続したとみられる。

1594年にロンヴェークからウドンに遷都されたといわれるが、17世紀にカンボジアを訪れたオランダ人は、カンボジアの都をLeweckやEauweckと表記しており、これはLongvekにあたると考えられる。つまりウドン遷都後もロンヴェークが機能していたか、またはウドンと直線距離にして5、6kmほどしか離れていないことから、何らかの形で継続して利用された可能性も考えられる。すなわち、ロンヴェークはカンボジア国内文献上では16世紀代の王都であるが、17世紀以降の痕跡の存在にも留意したうえでの調査が求められた。

参考文献：北川香子「ポスト・アンコールの王城」、『東南アジア-歴史と文化-27』、p48-72、1998



第51図 ロンヴェーク位置図

第3節 遺構

先述のとおり、文献史料に基づく研究は先行的に進められているが、『王朝年代記』自体の信頼性が乏しいのもまた事実である。というのも、王朝年代記は19世紀になって編纂されたものであり、その史料価値をどのように捉えるか難しい問題を伴っている。したがって、ロンヴェークを研究する際に、実際の遺構・遺物に真正面から向き合う考古学的な手法が有効になるものと考えられる。奈良文化財研究所は2010年度よりロンヴェークにおける考古学的踏査を開始した。手法としては、遺構ないし遺物を確認した地点に番号付けをおこない、GPS・遺物情報などを記録し、インヴェントリーを作成した。そもそもロンヴェーク内における遺構・遺物の分布などの基本情報さえ、不明であったことから、まずはロンヴェークの全体情報を把握することに努めた。

調査の結果、ロンヴェークは三辺を土塁と堀に囲まれた方形の都城であることが判明した。また、ロンヴェーク内には仏教テラスなどの上座部仏教寺院、マウンドなど様々な遺構が確認された。現在までのところ寺院または仏教テラス遺構20基、マウンド9基が確認された。村人からの聞き取り調査では、ロンヴェーク内には108基の遺構が存在しているという。今回の調査では、ロンヴェーク内全域を網羅できておらず、未踏査地域がかなり残っているため、今後更なる調査が必要である。本項では、確認された土塁と堀、寺院についてその概要を記す。

土塁と堀 ロンヴェークは三辺を土塁と堀に囲まれている。現在、土塁は一部が近年になって農道によって削られ、断面が露出する箇所が存在するものの（第53図）、そのほとんどが良好な状況で確認することができる。また、堀は稲田として利用されている。ロンヴェークの土塁は、自然地形を活かした範囲に設計されているようで、氾濫原よりやや高い台地の縁を利用する形で土塁を形成している。北・西辺はそれぞれ三重に、南辺は一重に土塁を築盛し、東側はトンレサップ川の氾濫原に面するためか、土塁は存在していない。土塁はレンガやラテライトなどを使用せず、積土のみで築盛されている。高さは場所によって異なり、約4m～8mをはかる。また、南西隅には出隅状に複雑に張り出した土塁によって区画されており、ロンヴェーク都城の入口ないし防御施設であった可能性が考えられる。南辺土塁から、南側、すなわちウドン市街地方面に向けて3本の土塁がさらに南進しており、今後さらなる調査を要する。



第52図 南辺土塁と堀（西から）



第53図 西辺土塁断面



第54図 西辺土塁（南南西から）



第55図 切り通された西辺土塁

寺院 ロンヴェーク内に見られる寺院はすべからく上座部仏教寺院である。しかしながら、ロンヴェーク内に見られる寺院の建立年代を確定させるのは現段階では難しいといわざるを得ない。確実な碑文史料などが少ないことが理由の一つである。建立年代を特定することはかなわないが、ロンヴェーク内寺院の特徴を挙げたい。

寺院の種類 ロンヴェーク内に見られる上座部仏教寺院はだまかに 2 種類に分けられる。一つ目はマウンド上に建てられるテラス寺院（ヴィハーラ）、2 つ目は平地に展開する比較的大規模な上座部仏教寺院（パゴダ）である。テラス寺院は、シンプルな構成で成り立っている。仏像が鎮座するヴィハーラの手前に平面長方形を呈したテラスまたは、広場状の儀式空間が広がり、これらの構造物全体をセマ石が結界するものである。アンコール地域においても、このスタイルはしばしば見受けられ、アンコール・トム内には仏教テラス寺院が王朝末期からポスト・アンコール期にかけて次々と造営されている。しかし、ロンヴェークに見られるテラス寺院は、その多くが自然ないし人工のマウンド上に造営されている。一方、上座部仏教寺院のほとんどは現在も寺院として機能しており、近年になり増改築されているのがほとんどである。このため、ロンヴェーク期の寺院構造を復元することは現段階ではかなわない。しかし、基本構造としては、本殿・僧院・講堂・池が伽藍内に配置される。この場合、マウンド上に造るのではなく、洪水を避けた平地に展開しているようである。

増改築 アンコール期またはポスト・アンコール期に属する前身遺構を現在の寺域内に確認できる寺院が複数存在する点である。たとえば、ワット・トロラエン・カエンでは、アンコール期の砂岩製構造物とマウンドが寺域の中心部に存在し、現在ではそのマウンド上に釈迦坐像が構築されている。また、テラス寺院であるヴィヒア・バツ・コーでは、現在のヴィハーラが前身遺構であるとみられるレンガ造の基礎の上に建てられている。前身遺構の位置を活かす形で、現在も信仰が続けられているともいえる。

構造成材 寺域内にみられるストゥーパやヴィハーラの基礎はそのほとんどがレンガ製であることが挙げられる。アンコール期の寺院の多くは砂岩やラテライトが用いられるが、ロンヴェークではレンガを用いるのが主流であったとみられる。一方、寺域を結界するセマ石は砂岩製である。つまり砂岩の使用が限定的であったといえるだろう。



第 56 図 マウンド上に建つヴィヒア・バツ・コー



第 57 図 ヴィヒア・バツ・コー本堂直下の前身遺構



第 58 図 プレア・アン・テブ本堂



第 59 図 ワット・トロラエン・カエン内アンコール期遺構

セマ石 ロンヴェーク内寺院の一部にはセマ石（結界石）を確認することができた。セマ石は、寺院の四隅とその各辺中央の合計 8 か所に配置され、寺域を結界する意味を持つ。カンボジアでは上座部仏教寺院に特徴的にみられるものである。今回の調査でセマ石を確認することができたのはごくわずかで、ワット・トロラエン・カエン、ヴィヒア・バツ・コー、トゥオル・バイヨークなど数か所のみである。しかも、残念ながら原位置をとどめているセマ石は殆ど確認できず、地上に放置されたままのセマ石も少なくなかった。唯一ワット・トロラエン・カエン本堂のセマ石は改築に伴い埋め直されているものの、しかるべき位置に配置されていた。ロンヴェーク内で確認したセマ石は大きく 2 種類に分けられる。一つは、砲弾型または下部にくびれを持つ矛先型の中心に一条の稜線が縦方向に走り、表裏共に装飾を伴わず、頂部には蓮の蕾が表されるタイプ（第 60 図）。2 つ目は、同じく砲弾型または矛先型の表面に唐草文様などの装飾を伴うタイプである（第 61 図）。装飾を伴うタイプは現在までのところワット・トロラエン・カエンでのみ確認されている。

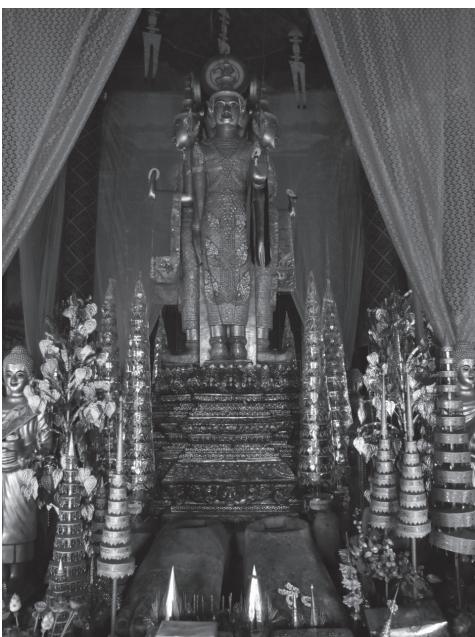
仏像 現在ロンヴェーク内で確認できる仏像の殆どは新しく造像されたものであるが、ごく一部の寺院にロンヴェーク期にさかのぼる可能性のある仏像を確認することができた。ワット・トロラエン・カエン本堂内に安置される本尊は四仏立像が安置されている。現在の四仏は後世に造像されたものであるが、ロンヴェーク期にさかのぼると想定される四仏に関しては、現在足材のみ確認できる（第 62 図）。足の全長が 1m を超すことから、四仏本体の高さも相当であったと想定される。またその他にもヴィヒア・バツ・コーにはアンコール期寺院建築の赤色砂岩を転用した仏陀坐像が祀られている（第 63 図）。



第 60 図 トゥオル・バイヨークのセマ石



第 61 図 ワット・トロラエン・カエンのセマ石



第 62 図 ワット・トロラエン・カエン四仏足材



第 63 図 ヴィヒア・バツ・コー仏陀坐像

第4節 出土遺物

ロンヴェークにおける踏査では、地表面から数多くの遺物採集することができた。確認した遺物は多岐にわたり、表採遺物の半数以上が中国青花片であることは特筆される。ロンヴェーク時代に行われたであろう活発な貿易活動の証である。表採遺物は総数 1500 点を数える。このうち 60% が中国青花、10% が施釉陶器、10% が無釉炆器、11% が土器でそのほかクメール陶器、中国青磁、白磁、五彩などを確認した。

中国

青花

碗 第 64 図 1 は青花碗である。口縁径 14.1cm、器高 6.0cm、高台径 5.6cm を測る。外面口縁部文様帯以下に馬文が描かれている。内底見込にはコングが表されている（第 66 図 1）。第 64 図 2,3 は青花劃花文碗である。口縁径 18.1cm、高台径 6.6cm で同一個体である。口縁はやや端反り気味で、外面口縁部には唐草文帯、体部下端には略化した蓮弁文帯が描かれる。外面体部には劃花文が全体に施されている。内面口縁部には菱格子帯文、見込には山水文が表されている。高台内面に二重円枠の中に銘が施されていたようであるが、残存部が少ないため判読不能である（第 66 図 2）。第 64 図 4 は青花碗片である。高台径 5.2cm。口縁部は残存していないが、外面体部には花卉文、内底見込には植物文が施されている。高台内面には「永保長寿」銘が記されている（第 66 図 3）。第 64 図 5 は青花碗底部片である。高台径は 7.8cm である。内底見込に植物文が描かれ、高台内面には「大明年造」銘が円形枠の中に記される（第 66 図 4）。第 64 図 6 は青花碗底部片で高台径 9.2cm を測る。内底に植物文が施され、高台内面には銘が残るが判読困難である（第 66 図 5）。第 64 図 7 は青花碗底部片である。高台径 8.0cm、内底が饅頭心状に膨らむ。内底見込には花卉文が描かれ、高台内面には方形枠の中に篆書体で「精製」を表しているとみられる（第 67 図 1）。第 68 図 8 は青花碗底部片で、高台径 4.6cm を測る。内底見込には人物文が描かれ、高台内面には円形枠の中に「福」銘が表されている（第 67 図 2）。第 64 図 9 は青花碗片で、仙芝祝寿文が表される。口縁径 12.0cm、器高 5.8cm、高台径 6.4cm を測る。高台はやや外側に開き、内側に銘が薄く書かれているが、状態が悪く判読不能である（第 67 図 3）。第 64 図 10 は青花碗底部片である。内底には団龍文が描かれ、高台内面には文字が表されるが判別不能である。

皿 第 64 図 11 は青花皿底部片で、内底には鳳凰文の一部が見て取れる。高台内面には「萬福倣同」と思われる文字が残る。第 64 図 12 は青花芙蓉手皿ないし盤の口縁部片である。口縁径 14.6cm を測る。口縁端部は輪花状に作り出される。外面には唐草文が施され、内面口縁部には渦卷文帯が巡る（第 67 図 4）。

壺 第 65 図 1 は青花蓋片で、壺または罐に合わさるものと思われる。径 4cm である。外面には唐草文が施され、内面は無文である（第 67 図 5）。

合子 第 65 図 2 は青花合子蓋片である。径は 6.4cm で、平形合子であったと思われる。外面には花卉文が描かれる（第 67 図 6）。第 65 図 3 は小型合子の身片である。口縁径 1.8m、器高 2.1cm、高台径 1.2cm を測る。外面胴部に花卉文が描かれる（第 67 図 7）。

特殊遺物 第 65 図 4 は青花脚付小形製品の脚部分である。獣脚状に作り出されている。外面脚部分には施文されるが、内面は施釉されるものの無文である（第 68 図 1）。

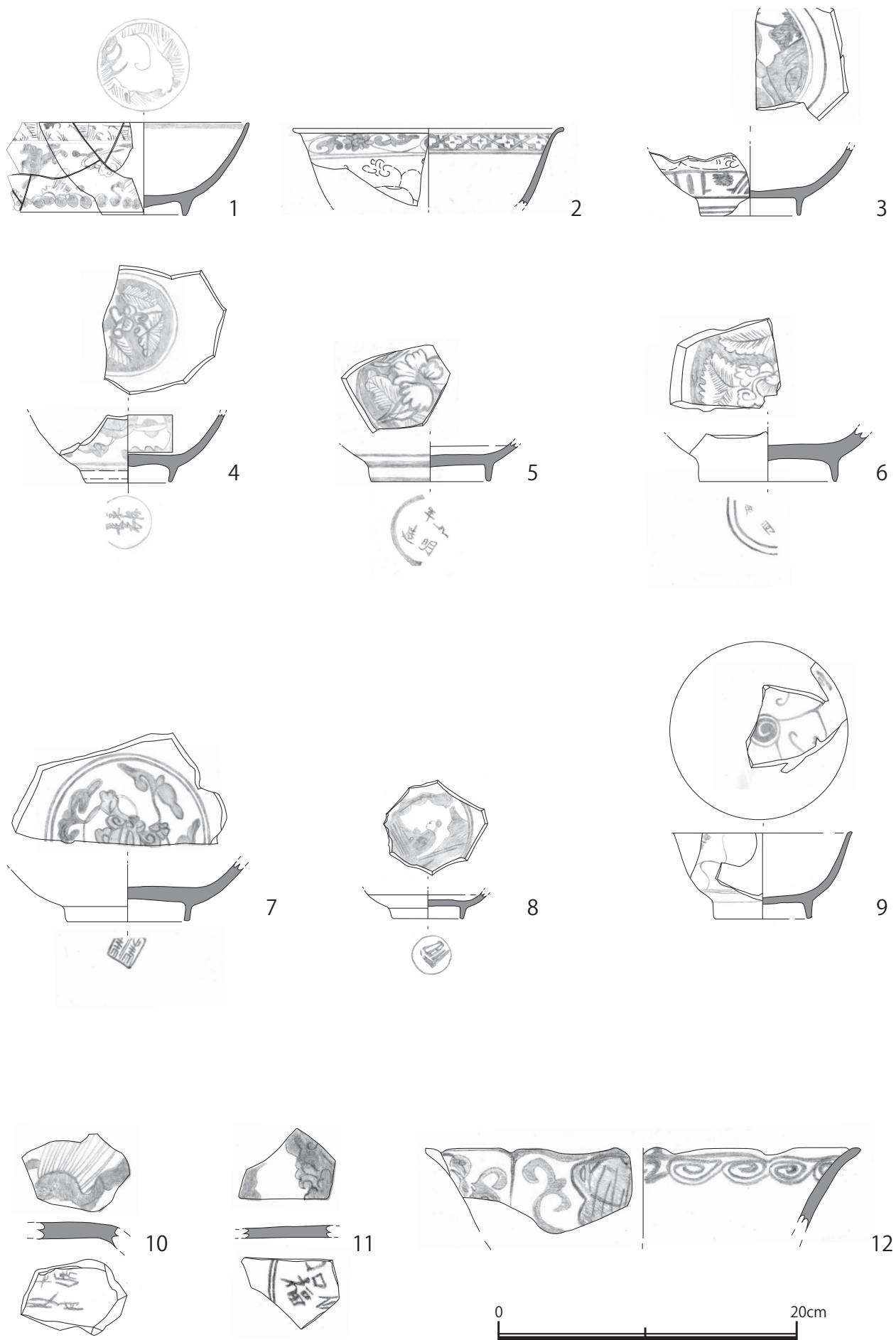
緑地青花 第 65 図 5 は緑地青花碗口縁部片である。口縁径 8.2cm である。外面は全面青磁釉が施され、内面には青花で菱格子帯文が表される（第 68 図 2 中）。

黄地青花 第 65 図 6 は黄地青花小碗底部片である。高台径は 3.6cm で、外面に黄色釉が施される。高台内と内面は青花で表現され見込には花卉文が描かれている（第 68 図 2 左）。

五彩青花 第 65 図 7 は五彩青花碗体部片である。外面には緑と赤地が残存しており、内面体部には青花による文様が施される（第 68 図 2 右）。

タイ青磁・鉄絵 第 65 図 8 はタイ青磁碗底部片である。高台径 6.8cm。釉色は灰緑色に近く、外面体部下半まで、内面は全面施釉されている。内底に二重圏線が施され、高台内面には筒形敷柱痕が残る（第 68 図 3）。第 65 図 9 はタイ鉄絵製品の一部であるが、器形は不明である。素地を摘み状に包むように作り出している。外面体部に濃紺から黒色に発色する鉄絵を施し、内面は無釉である（第 68 図 4）。

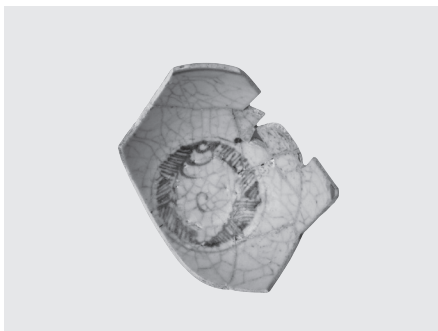
クメール黒褐釉陶器 第 65 図 10 はクメール陶器黒褐釉壺口縁部片である。口縁径 14.4cm を測る。内外面とも黒褐釉が施されている（第 68 図 5）。



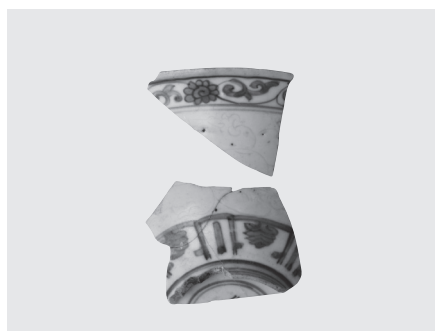
第 64 図 出土遺物実測図 1



第 65 图 出土遺物実測図 2



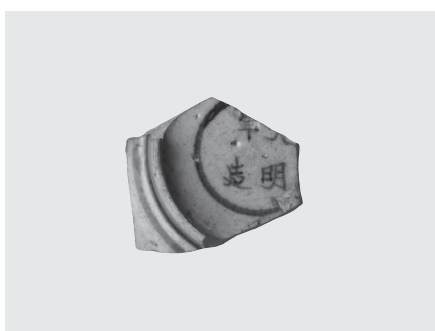
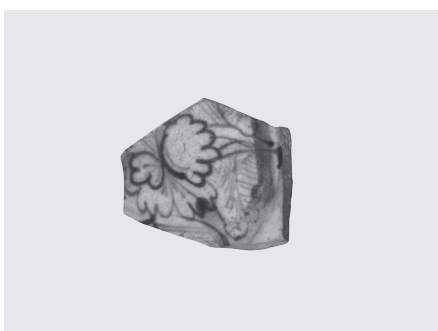
1. 青花碗片 1



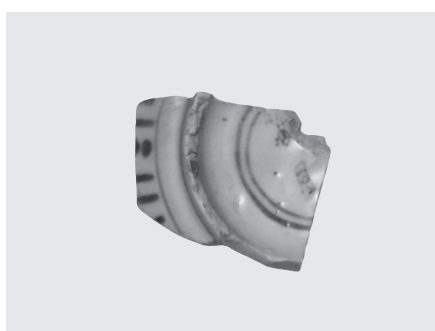
2. 青花碗片 2



3. 青花碗片 3

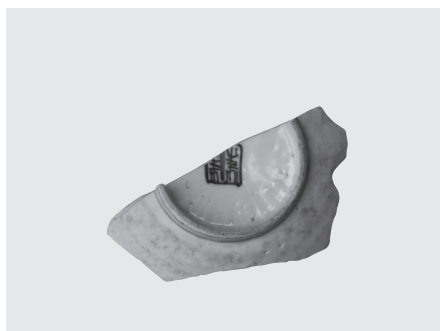


4. 青花碗片 4



5. 青花碗片 5

第 66 图 出土遺物写真 1



1. 青花碗片 6



2. 青花碗片 7



3. 青花碗片 8



4. 青花輪花盤片

5. 青花蓋片

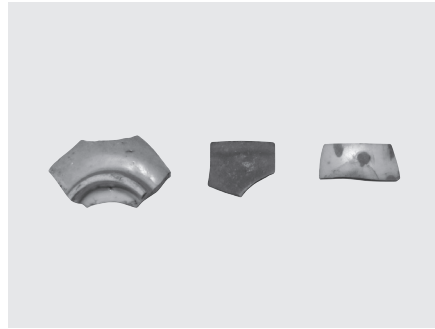
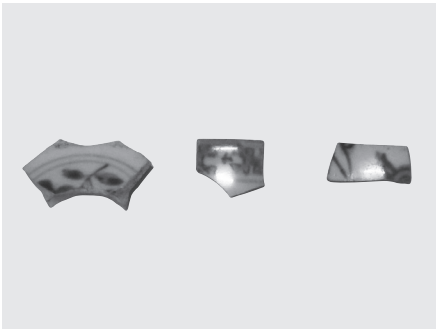


第 67 图 出土遺物写真 2 6. 青花合子蓋片

7. 青花合子身片



1. 青花脚部片



2. 黄地青花、緑地青花、五彩青花片



3. タイ青磁碗底部片



4. タイ鉄絵摘部片



5. クメール黒褐釉陶器壺片

第 68 図 出土遺物写真 3